



TITLE:

日中韓三国の『續千字文』比較研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

李, 孝善

CITATION:

李, 孝善. 日中韓三国の『續千字文』比較研究. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19816>

RIGHT:

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	李孝善（Lee Hyosun）
論文題目	日中韓三国の『續千字文』比較研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>南朝・梁の周興嗣（521没）が撰述した『千字文』は、かつて東アジア漢字文化圏に属する国々において、長期にわたってもっとも代表的な識字教科書として使われてきた。本学位申請論文は、日本・中国・韓国で『千字文』を増補改訂するという形で作られた異系『千字文』に焦点をあて、そのうち書名を『續千字文』と題するもの計10種類について、それぞれの書物が成立した経緯と背景を論じ、さらに周興嗣『千字文』との比較を通じて見える当該の書物の特質などをあきらかにしようとした研究である。</p> <p>論文は5章にわかれ、「序章」では、申請者が本研究テーマに関心をいだいた動機と研究目的、範囲、方法が述べられ、さらにそれぞれの国での先行研究が紹介される。</p> <p>第1章「日本の『續千字文』」では、日本への『千字文』伝来に関する伝説と史実が検討され、続いて平安時代の三善爲康『續千字文』（1132）と、江戸時代の井出正水『續千字文』（1735）が取りあげられる。三善の『續千字文』は『群書類従』所収本では本文が742字しかなく、亡失部分は伝わっていないが、跋文の記述からもともと一千字で構成されていたことがわかる。井出の『續千字文』は総字数が一千字あり、ともに本文が隔句押韻の4字句を連ねて叙述されているので、その二つが周興嗣の書に準拠して作られたことはまちがいない。しかし本文の用字はオリジナルのものとは大きな出入りがあって、三善の書では742字のうち4文字、井出の書ではわずか1字しか、周興嗣の用字と重ならない。このように2つの『續千字文』がオリジナルの『千字文』の文字をできるだけ使わないように作られているのは、平安時代でも江戸時代でも、一般的な漢字学習の場では周興嗣『千字文』所収の一千字だけでは足りず、それ以上の漢字をさらに習得する必要があったからだとする。</p> <p>第2章「中国の『續千字文』」では、秦漢から周興嗣『千字文』までの識字教科書の流れが概観され、続いて中国で作られた異系『千字文』の概要が紹介される。その中で申請者は、北宋の侍其良器（1104没）の『續千文』、明代中期の陳鏐（1575没）の『別本續千字文』、明末の黄祖顥（1672没）の『續千字文』、また同じ人物による『再續千字文』の4種を取りあげる。これらはいずれも一千字で構成されているが、本文中に重複して使われる文字が、侍其良器『續千文』では6字、陳鏐『別本續千字文』では15字、黄祖顥の『續千字文』では13字、同『再續千字文』では3字ある。周興嗣のスタイルに準拠して隔句押韻の4字句を連ねる形式は踏襲しているものの、総計一千字をまったく重複せずに用いることは、中国人の著述においても困難であったことがそこから見て取れる。またそれら4種の書物は時代も著者もちがうために、内容が大きく異なってくるのは当然だが、黄祖顥という同じ人物が著した二つの『續千字文』においても内容が異なっていることの背景には、『千字文』の形式を取りながら周興嗣の書に記されていない種々の文字と知識をより多く、より多様な形で学ばせたいという目的があったからと考えられる。『千字文』の形式は、中国では非常に早い時代から社会に深く浸透しており、歴代の教育者たちはその形式を利用しつつ、それぞれの時代のニーズに合う知識を包括したテキストを編み、それを識字教科書として利用した。そこに当時の教育に携わった人々の努力の結実を見ることができる。</p> <p>第3章「韓国の『續千字文』」では、韓国で作られた異系『千字文』の概要が詳しく紹介される。中国人が著した書物のままではどうしても韓国の教育に適用しがたい面が</p>			

あることが韓国では過去に何度も指摘されており、そのため韓国人が作った異系『千字文』は中国や日本より格段に多く、20世紀中期にも10種、さらに21世紀に入っても3種作られている。このように21世紀に入っても異系『千字文』が作られるのは、中国や日本には見られない大きな特徴である。その多数の異系『千字文』の中から申請者は南景根『續千字』(1893頃?)、田錫雨『續千字文』(1903)、朴文鎬『續千字文』(1919)、金鍊泰『續千字』(1940?)を取りあげる。これらもすべて一千字で構成されているが、本文中の重複する文字が南景根『續千字』と田錫雨『續千字文』では7字、朴文鎬『續千字文』では2字、金鍊泰『續千字文』では5字ある。しかしいずれも周興嗣『千字文』とは用字が重ならないように編纂されており、それについては田錫雨と朴文鎬が序に、周興嗣の書だけでは必要な漢字が足りず、それを補うために『續千字文』を作ったと述べる通りである。知識人として学ぶべき「聖賢の書」には多量の漢字が使われており、それらを学ぶには周興嗣のものだけでは不十分だったのは自明である。韓国の『續千字文』は、儒学を国学とする韓国でよりよく儒学を理解するために必要な漢字をさらに多く習得するために作られた識字教科書であった。

最後に置かれる「結章」では、以上の議論の総括がおこなわれる。申請者は、三つの国で作られた『續千字文』には次の三つの共通点があると論じる。

一つはすべて周興嗣『千字文』の形式に準拠して作られていることである。その形式とは4字句を連ねた一千字で構成され、記憶に便利のように隔句押韻し、本文中の文字を重複させないことであるが、三国で作られた各『續千字文』も、すべて一千字で作られ、隔句押韻する4字句を連ねていて、用字もできるだけ重複させないようにとの配慮がなされている。

共通点の二つ目は、周興嗣『千字文』で使われている漢字をできるだけ使わずに新しい教科書を作ろうとする点である。字種の重複を避けるのは、周興嗣の著述に含まれている文字だけでは習得量が足りないと考えられるからで、また日本や韓国では自国独自の文化や歴史に必要な文字が周興嗣『千字文』には入っていないとの認識があった。いくつかの『續千字文』の序跋に、周興嗣『千字文』は文字数が少なすぎるとか、知識人として必要な内容が盛りこまれていない、という主旨の記述があるのがそのことを物語る。

共通点の三つ目は、それぞれの『續千字文』が周興嗣『千字文』の次の段階で学ぶ教材と位置づけられていることである。いずれの国においても、寺子屋など初等教育機関でおこなわれたカリキュラムでは、学習はまず周興嗣『千字文』から始まったが、それを終えた者に対する次の教程が特別には用意されていなかった。そのために彼らは、用字面でも内容面でも、オリジナルの『千字文』を補完する目的で編纂された教科書として『續千字文』を作ったのだった。

研究の最後に、三国で作られた『續千字文』の研究を通じて、申請者はこれからの漢字をめぐる国際的な状況にも言及する。現代において日本・中国・韓国での漢字使用の状況は一樣ではなく、漢字教育と使用範囲は国ごとに異なっているが、その状況を克服し、これからの東アジア漢字文化圏の望ましい将来を構築していくためには、かつてそれぞれの国で漢字教育に大いなる情熱を燃やした先人たちの大きな功績があったことを忘れてはならない、と主張する。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、南朝・梁の周興嗣(521没)が撰述した『千字文』を増補改訂するという方法で、日本・中国・韓国で作られた異系『千字文』のうち、書名を『續千字文』と題するもの計10種類について、それぞれの書物が撰述された経緯と文化的背景を論じ、さらに周興嗣『千字文』との比較を通じて、各『續千字文』の特徴をあきらかにしようとする研究である。百済から派遣された王仁が日本に『論語』と『千字文』を将来したという伝説が『日本書紀』に見えるように、『千字文』は非常に早い時期に中国から周辺の国々に伝わり、それ以後長期にわたって各国でもっとも代表的な識字教科書として使われてきた。したがって『千字文』そのものに関しては、中国はもとより、日本や韓国においてもきわめて大量の刊本や写本が残っており、またその書物に関しても、これまで多数の注釈や研究書が著されてきた。しかし『千字文』をモデルとして作られた異系『千字文』については、中国ではこれまではほとんど研究の対象とはされず、韓国と日本では数十年前に先駆的研究がおこなわれているものの、しかしそれ以後の新しい知見はまだ総合化されていない。それに対して本学位申請論文は、申請者が韓国の慶星大学大学院に提出した修士論文でおこなった韓国の異系『千字文』に関する研究の範囲を日本と中国にまで広げ、より全面的な研究を目指したものである。

申請者の研究における優れた点として、以下の二点をあげることができる。

一つは関連資料の全面的な収集である。申請者は『續千字文』と題する異系『千字文』について、日本2、中国4、韓国4の計10種を収集し、具体的に図版を掲げて考察を加えているが、異系『千字文』に属する書物が単体で刊行され流通することはきわめてまれで、そのうちのいくつかは冷僻な叢書に収録されているものの、ほとんどは孤本として各国の蔵書機関に所蔵されているにすぎない。実際にそれらを目撃することはきわめて困難なのであるが、申請者は日本では東洋文庫、東京温故学会、早稲田大学図書館、韓国では韓国国立中央図書館、嶺南大学図書館を訪れて閲覧し、所蔵機関に申請して電子データを取得した。さらに韓国の異系『千字文』の一つとして取りあげた金鍊泰の『續千字』は、申請者が2010年に韓国のソウル市にある古書店「學善齋」で偶然見つけて購入したものであり、それはこれまでまったく存在を知られていなかった書物であった。その著述年代について、同書巻首に「庚辰五月二十四日」とあるのを申請者は1940年と推定するが、もしそうであるなら、日本語の使用が強制されていたとされる日本統治下に、各漢字の下にハングルで音訓を附した『續千字』が韓国で撰述されたことになる。それは日本統治下の言語政策に関する定説を覆す可能性をも内包する、非常に重要な発見であるといえる。

申請者の研究に見えるもう一つの優れた点は、『千字文』に関するデータベースを作成し、それを活用して各『續千字文』の執筆の動機や当時の社会背景などをあきらかにしたことにある。申請者は収集した『續千字文』10種すべての本文をコンピューターに入力し、修士論文執筆時にすでに作成していた韓国の異系『千字文』データベースと統合して拡大し、それによって研究を進めた。日本と中国・韓国ではコンピューターで漢字を処理する技術が現在ではまだ完全に統一されてはおらず、三国の文献を相互横断的に処理するのは多大の困難を伴うが、しかし申請者は卓越した情報処理能力によって難関を克服し、あわせて写本上に見えるが電算処理のためのコードを持たない異体字をも画像データとしてデータベースに取りこんで、各『續千字文』分析のための資料として十全に機能させた。

本学位申請論文は、これまで研究がほとんど進んでいなかった異系『千字文』について、その代表的な著述の背景と特質をあきらかにした研究であり、東アジア漢字文化圏を成立させるためのもっとも根源的な要素であった伝統的識字教育の様相を深く掘り下げた、質の高い研究となっている。現代において日本・中国・韓国での漢字使用の状況は一樣でなく、音訓と字体の相違はもとより、漢字教育のためのシステムも国ごとに異なっている。その不統一を克服し、これからの東アジア漢字文化圏の望ましい形を構想していくためには、過去にそれぞれの国でおこなわれた漢字教育をめぐる文化的営為を跡づける必要があるが、その志向に対してこの研究が果たした役割にはきわめて大きなものがある。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降